

ミステリ読書案内

2023. 2. 5 発行元

第444号 伊藤 剛

<https://mystery-dokuan.com>

最近出た本の中から

最近になって出版された本の中から4冊を紹介する。今回もシリーズものの最新刊を取り上げた。いずれも年末の12月に出版された本。年が明けての2023年の1月は本の動きは今一つ良くないようだ。

出版界にも休業はあるのか？

私が長年勤めていた学校では12月29日から1月3日までは年末年始休業。また、市の学校管理運営規則には12月〇〇日から1月〇〇日まで冬季休業と定められている。年によって暦が動くので、絶対守らなければならないものでもないが、一応の原則線の形で。

出版界には休業があるのだろうか。12月末の25日に新刊書店に行き、1月6日にまた行ってみるとほとんど動きはない。「まだ動きだ

していないんだなあ」と思ったりする。今時だから、勤務時間度外視の働きづめは良くない。休業があっても当然だ。作家も編集者も印刷業者も卸元も運搬業者も年末年始ぐらいはゆっくりしてほしい。一週間や十日ぐらい遅くなったって、私たち読者には大きな影響はないから。

大切なのは本を供給し続けてくれること。「いい本作りをしてください」。もし私が教員にならなかつたら本作りの仕事もやってみたかったなあと思う。実情知らずの、遠くからの思いだけだけれども…。

松岡圭祐「écriture 新人作家・杉浦李奈の推論VIIレッド・ベリング」

12月に角川文庫から出版された本。シリーズ七作目。ビブリオミステリーと名付けられたシリーズで、今回のテーマは明治初めに出版された『丸善版新約聖書』。限定500部作られたもののようで、現存しているかどうか危ぶまれている本らしい。なぜか、杉浦李奈にネット上の攻撃が連発され、会社社長の鶴巢東造から強制的に本の捜索に駆り出される。情報を持っているらしい人物が図書室の本棚に押しつぶされる事件は早々に解決になったのだが、肝心の本は見つからない。「なぜ聖書を探すのか」の理由が判明してくる後半からは、明確な行動が取れるようになってくる。さて、結末は…。

山本巧次「入船長屋のおみわ 紅葉の家」

12月に幻冬舎時代小説文庫から出版された本。シリーズ5冊目。『八丁堀のおゆう』は現代と江戸時代を行き来するが、こちらは完全に江戸時代そのもの。その分派手な仕掛けは作れない。少し地味に見えるのはそのため。

今回は、お美羽の住む入船長屋の持ち主が依頼人。寿々屋の主人・宇吉郎が柳島の方で隠居所によいと思って買い入れた家を巡る事件。宇吉郎が買ったとたんに関係する人物が二人現れた。何の変哲もない家に高値を出す話を疑問に思っ、お美羽に背景を探るように頼んだのである。元の持ち主は亡くなっており、関係する人達から情報を集めていくと「お宝」の話が浮上してきた。読売に取りあげられたりして混迷する。

鳴神響一「神奈川県警ヲタク担当細川春奈4」

12月に幻冬舎文庫から出版された本。シリーズ4冊目。副題は『テディベアの花園』で、今回の「ヲタク」のテーマは「テディベア」。三浦市の別荘で密室状態の中、針で刺されて死亡した人物を発見。そこには親の代から引き継いだテディベアのコレクションがあり、「PB55」と「TCOA」と書き残した被害者メモが残っていたというのだ。春菜はさっそく登録捜査協力員に連絡を取り、テディベアの歴史と現在の状況を学び始める。100年以上前に生まれたアンティークベアとなると貴重品で、高値で取引されるという。さて、今回の事件では…。

渡辺裕之「凶撃の露軍 傭兵代理店・改」

12月に祥伝社文庫から出版された本。シリーズ27冊目になる。前作の『邦人救出』でアフガニスタンのカブール陥落を扱ったと思ったら、今回はロシア軍によるウクライナ侵攻を取り上げている。過去に起こったことではなく、現実の出来事に追いついてしまった。日々展開している状況を知る意味でも、戦いの一面を伝えてくれていると思う。

藤堂浩志を中心とするリベンジャーズと明石柊真を中心とするケルベロスのメンバーはアフガニスタンでの遺体回収のための活動の後、その原因を作ったロシアの民間軍事会社ワグネル・グループを追ってウクライナ入りする。「ワグネル」はプーチン大統領の意向を受け、「プーチンのシェフ」と呼ばれるオリガルヒの資金で秘密工作を仕掛けているという。大統領の暗殺計画か、または拉致か…。まさに侵攻直前のキーウの出来事として描かれている。現実を土台にしたフィクションで、2014年のクリミア半島の併合から、ゼレンスキー政権に至る一連の流れが説明されている。